



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 耕作放棄地を憂う

農作物が一年以上作付けされず、数年のうちに作付けされる予定のない田畑や果樹園のことを「耕作放棄地」と言いますが、この言葉を聞いて連想したのは、過疎と高齢化が進む中山間地域の、作り手がなくなつた急斜面の畑でした。事実県内外のそんな田舎を旅すると、耕作放棄された田畑はおろか、住み手がいなくなり、屋根が朽ち落ちた人家の姿を目の当たりにして胸が痛くなるのです。ところがつい最近はそのような事情が少し変わって、山間地でもない街があった、私たちの町のように垂直農業と揶揄される急傾斜地域からすれば、一等地・二等地と思える羨ましいような平地の田圃や畑でも、「これがどうならや!!」と思われるほど、雑草に覆われ荒れ果てた姿を見かけるようになりました。

農地が耕作放棄地になる原因は、農業者の高齢化による労働力不足が全体の

五十%以上を占めています。労働力不足は勿論のこと、土地条件の悪いところ、農地の受け手がいないところは耕作放棄のスピードが早く、昭和六十年から平成十七年までの放棄地面積率はそれまでの三倍になって、二〇〇五年農業センサスによれば三十八・六万haと、埼玉県の面積にほぼ匹敵するほどに増え、人口減少や空き家増加とともに、この国の大きな社会問題となつていきます。



伊予市双海町 「本谷の棚田」

このことに危機感を持った政府は平成九年に農地法を改正し、企業等による農業への新規参入が出来るようにして資本や人材を投入し、非生産的といわれている農業への新規参入を促し、経営の効率化、農地の集約化などを試みようとしています。ですが、それらの動きに呼応するように耕作放棄地を再利用する動きが、少しずつ広がりつつあるものの、抜本的な農業改革には至らず、閉塞感が漂っていることも事実のようです。一方でわが国の自給率は三十九%といわれていて、先進国の中でも最低水準にあるのに、耕作放棄地が拡大し続けていることは、考えてみれば何とも皮肉な話ですが、TPP（環太平洋パートナーシップ協定）によって自由貿易が進めば、小規模経営ゆえ競争力の弱い日本の農業は立ち行かなくなり、このままだと壊滅的になるのではないかと農業者は危惧しています。

米を作りながら「百姓じゃあ飯が食えない」と、まるで落語のネタになりそうな話をする農家の人の話を、私たちの身の回りではもう三十年も前から聞いてきました。またいくら作っても有害鳥獣の被害に遭い「イノシシやカラスの餌を作っているようなものだ!!」と、やり場のない声で話す言葉も日常茶飯事の会話として聞いています。また跡取りは都会へ出て行き、ひっそりと農業を営む老夫

婦は、「百姓はわしら限りで終わりだ」と諦め顔で話していて、耕作放棄地の拡大を予測させるような、様々な人間模様を見聞きしていると、これが先進国といわれる日本の姿なのかと、無策な農政に憤りすら覚えるのです。

他人事ではなく増え続ける耕作放棄地を、さてどうすると考えてみても、浅知恵な私たちに妙案は浮かぶはずありませんが、最近そんな暗い農業事情の中でも、都会から脱サラして耕作放棄地を借り受け、田舎で農業をやるうとしている物好きと思える人がいたり、海外で高い評価を受けている日本の農作物の安全性に注目し、長年使っていないことが幸いして、農薬や除草剤、化学肥料が残留していないため、有機農業に最も適した一番綺麗な土地であることから、わざわざ過疎の象徴といわれる耕作放棄地や農地を集約し、都会の消費者が欲しがると安心安全な農作物を、大量に生産する一大産地を作り、独自の販売ルートやネット通販を駆使して成功を収めている人もいます。また既に産地化している柑橘農地を、高齢化を理由に手放す人が多くいることに目をつけ、規模拡大を図って農業法人を設立し、通勤農業者を雇い入れて地域の働く場所を確保した人もいます。さらには農家の耕作放棄地を借り受けて農地に再生し、ハウス等を整備し

て野菜作りに興味のある人に貸し出したる、農園管理型農業を新たに興す人や、食品加工会社と提携して契約栽培をする企業も始めています。

耕作放棄地が農業や社会に与える影響は計り知れないものがあります。一度耕作を止めて数年経てば、農地はその原形を失うほどに荒れて再生不可能地となり、過疎や高齢化に悩む農村のひなびた姿に拍車をかけてしまっています。また周辺地域の営農環境にも悪影響を及ぼし、雑草雑木に覆われた耕作放棄地は病害虫、有害鳥獣被害発生の温床ともなり、農業用排水施設や農道・作業道の管理も出さず支障をきたしてしまうのです。

田舎では最近農地の見回りもままならないことから、耕作放棄地へ土砂やゴミを不法投棄する事件が多発して頭を悩ませています。捨てられた物が雑草雑木程度ならまだしも、コンクリート片やプラスチック、タイヤなどの産業廃棄物はいつまで経っても腐らず、地域住民の生活環境への悪影響は言うに及ばず、簡易水道に頼って暮らしている人々の、水質汚染にも影響は及んでいくようです。

農村を取り巻く環境には自然環境、社会環境、生活環境、教育環境などが挙げられますが、いずれの環境も速いスピードで劣化後退の道を辿っていて、中山間地域直接支払い制度や農地・水環境保全

向上対策などをしたくても担い手がいなくなり、このままだと十年もすれば限界集落は消滅し、準限界集落は限界集落となって、農村は耕作放棄地だらけの人の住まない地域となってしまっています。

三十年も前、ある町の広報マンが「わが町の人口がゼロになるのはいつの日か？」というショッキングなテーマで広報特集を組みました。その記事の中には高齢化や過疎化といった農村に忍び寄る影をいち早く鋭く捉え、耕作放棄地で農村は今に住めなくなると警鐘を鳴らしました。高度成長期が過ぎ安定成長を迎えた昭和の時代だっただけに、「そんなことあるもんか!!」と、殆どの人がその広報を見て鼻で笑って一蹴しました。その広報マンはひよつとしたら予言者だったのかも知れないと思う今日この頃です。

「金次郎 上杉鷹山 いたならばこの難局を どう乗り切るか」  
 「あちこちの 耕作放棄地 見るにつけ心が痛む 昭和の世代」  
 「二等地 二等地さえも 荒れてゆくこの国何処へ 行くのだろうか」  
 「イノシシや カラス喜び 遊び場に耕作放棄地 ワンダーランド」  
 (若松進一笑売噺より)